

stress の存在を許容する。この考え方に従えば、High Dive の High Fall がになっている stress は、descending pre-head の中の stress と解釈できる。

pre-head の中でも stress があり得る、とする本書の理論は、妥当である。発話全体に emphasis を置く場合、話し手は、しばしば、accent のない要素の stressed syllable にも stress を置くからである。⁽⁴⁾

本書は、発話を、statement, wh-question, yes-no question, command, interjection に分類し、それぞれの tone group に対して、これらの発話の種類ごとの感情の説明を加えている。また、抑揚練習のための豊富な例文について verbal context を示し、例文の多くには、その文に続き得る発話も示している。こうした配慮により、本書は、抑揚とそれが伝える感情との関係を解説することに、かなり成功している。

本書の抑揚分析は、かならずしもシステムとしてまとまってはいない。むしろ、多くの tone groups を設定してそれらを並列に挙げた、という印象を与える。それは、本書を、理論書ではなく、学習者のための実用書としよう、という意図が著者にあるためであろう。著者のこうした意図は、相当、達成されている。研究者にとっては、分析のシステムにこそ検討の余地があるかも知れないが、考察の具体的材料を提供してくれる、よき資料となるろう。

J. D. O'Connor and G. F. Arnold, *Intonation of Colloquial English*, 2nd ed., Longman Group Ltd., 1973

注

1. J. D. O'Connor and G. F. Arnold, *Intonation of Colloquial English*, 1st ed. (London: Longmans, 1961; rpt. Tokyo: Maruzen, 1964).

2. 連続的变化をする抑揚曲線については、D. L. Bolinger, "Intonation and Analysis," *Word*, Vol. 5, No 3 (1949) や、Bolinger, *Generality, Gradience, and the All-or-None*, *Janua Linguarum*, No 14 (The Hague: Mouton & Co., 1961) に考察されている。

3. Roger Kingdon, *The Groundwork of English Intonation* (London: Longmans, 1958).

4. Bolinger, *Generality*, p. 39.

J. D. スペンス著
三石善吉訳

中国を変えた西洋人顧問

麦谷誠子

本書は「在华西洋人顧問の物語」である。

スペンス氏は現在イェール大学歴史学科で教鞭を執る近・現代中国史の専門家である。

著者はまず 1620 年代から解放前まで中国で営々辛苦した何百人という西洋人顧問の中から 16 人をとりあげ、その人々（シャル、フルビースト、ピーター・バーカー、ワード、ゴードン、ロバート・ハート、H. N. レイ、W. A. P. マーチン、ジョン・フライヤー、エドワード・ヒューム、ミハイル・ボロディン、O. J. トッド、ノーマン・ペチューン、シェーンノート、スティルウェル、ウェデマイヤー）の生涯と心情感懐とを書簡・伝記資料を中心に再構成するとともに、豊富な資料を引用して同時代の社会的・歴史的背

景を詳細に投影することによって、彼らが当時の中国社会の中で果たした歴史的役割を克明に再現してみせた。

さらに著者の視点は過去の西洋人顧問にとどまらず、社会主義中国成立以後におけるソ連の各分野に対する援助とその実体、やがて中国から撤退せざるを得なくなった状況、そしてその撤退後の摸索から自力更生という基本姿勢をうちたてて、中国はもはや外国人顧問を必要としなくなったということのもつ現代的な意味にまで及ぶのである。

ここにとりあげられた 16 人は、宣教師、軍人、医師、教育者、土木技師、税務官吏、外交官、さらには職業革命家と、さまざまな分野にわたっている。彼らは例外なく恐るべきバイタリティーと不屈の精神、ゆるぎない確信をもち、ある種の使命感のもとにその生涯の大部分、或いは最も有意義な部分を中国に委ねたのである。彼らはあるいは希望を抱いて、あるいは栄光を夢見て中国に渡来し、中国ないしは中国人を変えようというてつもなく大きく深い命題に真向から立ち向かったのである。それ故、彼らの奮闘の跡は、そのまま中国の近代史・現代史の流れと重なりあう。彼らが変革を夢みた“哀れな、文明の光の届かぬ、遅れた”中国は、今や、彼ら西洋人顧問の手によってでなく、自らの手でめざましい改造を遂げた。中国人は西洋的なものへの変身を遂げたのでなく、それまでの社会を根底から覆えし、独自の社会、人間観、世界観を打ち樹てたのである。この 350 年にわたる西洋人顧問の活動は中国をいささかも“変えた”わけではなく、彼らの営為奮闘は単に“変えよう”と努力したに過ぎなかったのである。

とまれ、幻と歴史の流れの狭間で奮闘した西洋人顧問の生々しい生きざまと眩きは、それぞれにまさしく“物語”以外の何物でもない。これら 16 の“物語”によって構成され

た本書は、いわば他に類を見ない面白さをもつ格好の“読み物”である。しかし、本書は単なる“読み物”の域に止まるものではない。その資料操作的確さや懇切丁寧な原注、さらには訳者が原文に一つ一つ当って附した老大な訳注などによって、本書は本質的には中国近・現代史の一大俯瞰図として大いに価値ある学術書なのである。いずれにせよ、人をして一気呵成に読了させてしまう著者の筆致や実に見事というべきであろう。それは著者の研究者としてののみなみならぬ力量と深い造詣のなせる業であるが、そもそも「優越感というものがいかにいい加減なものであるか、他人への奉仕と搾取がいかに区別しがたいものであるか」(序文)という作者の鋭い批判に本書の出発点があるからに他ならない。

この 16 人の西洋人顧問の中で最も対照的な存在と言えるのは、ピーター・パーカー(3 章)とノーマン・ベチューン(8 章)であろう。前者は清朝治下の中国へプロテスタントの伝道師として、後者は抗日戦争の最中、中国共産党支配下の解放区へ同志としてやって来たそれぞれ医師であった。

ノーマン・ベチューンは今なお中国人から深く敬愛されている数少ない西洋人顧問の一人である。彼はカナダでの恵まれた生活を捨てて、はるばる中国にやって来た。彼は毛沢東と会った後、直ちに医療隊をひきいて前線に赴き、移動野戦病院を組織するとともに、医療技術を人々に教えた。「医師が傷病兵の所へ行け、来るまで待つな」というスローガンの下、徹底的に無私な心で手当に当たったのである。例えば、馬を駆って 75 マイルの道を通り走って戦場へ赴き、その直後 40 時間で 71 の手術を行ったり、69 時間ぶっつけで 115 人の負傷者の手当をしたりした。彼は過労の為、49 歳にもかかわらずまるで 70 歳位に見えたという。そして、ついに手術の傷がもとで敗血症に罹り、その生涯を中国革

命の前線で終えた。死の直前、聶榮臻將軍に宛てた遺書の中で、「最後の二年間は私の人生のうちで最も重要な、最も意義のある年でした。時にはたまらなく淋しいこともありましたが、私の最も愛する同志達にかこまれて、私は最高の任務を全うすることができました。もうこれ以上書きつづける力がありません。あなたに、そしてすべての私の同志たちに万感の感謝を……」と述べている。ベチューンは中国を交えつつあった人々への限りない尊敬と愛情、そして自らの使命を自覚し全力をあげてそれを遂行しえた人のみのもつ崇高な安らぎを抱いて死んだのである。彼の死後間もなく、毛沢東は彼の「毫不利己専門利人的精神」(いささかも己れを利することなく、専ら人を利する精神)に学ぶよう『ベチューンを記念する』という追悼の小文をしたためて彼の共産主義精神を顕賞した。そしてこの小文はプロ文革の最中、“革命家のもつべき基本的要件を示す必読文献”にあげられ、彼は今なお八億の中国人民の敬慕を集めている。そして今年、母国カナダの彼の生地ベチューン記念館が開設され、中国から贈られた大理石の胸像や中国で彼を記念して出版された各種の書籍などが展示されている。このニュースを伝えた人民日報は、「一人の共産主義の戦士たるベチューンの一生は光り輝くものである。彼の高尚な品德と無私の精神と英雄的な業績は、いつまでも人々の心の中に銘記されるであろう。ベチューン精神は永遠に光を放っている。」と評している。しかし、16人の西洋人顧問の中で唯一人中国に真の意味で受け入れられた無私のベチューンに対しても、著者の鋭い洞察の目が向けられている。「彼はおのれの時代の罪をあがなうべく中国に赴き、この文明を腐敗させたと彼が信ずる無関心さ、冷淡さ、利益追求といったものを、おのれのうちから必死においはらおうとしたのである。」と。

一方、パーカーは20年にも及ぶ中国での医師生活ののち、外交官に転じ、「アメリカ政府は人道上、文明上、航海上、商業上の利益を確保するべく、現在蛮人が住んでいる台湾島、とくに南東部にいささかのためらいもなく軍事行動を開始すべき時である」と驚くべき進言をした。これは西洋人顧問の辿った一つの典型的な帰結の姿である。

ピーター・パーカーは「この地上の光なき地に聖なる神の莊嚴なる福音の光を限なく分かち与える」べく、プロテスタントの宣教師として中国に渡った。シャルルやフェルピーストは星の科学(天文学)をもって中国戦略の武器としたが、彼は医学をもってしたのである。彼は意気揚々とニューヨークを出帆、広東に到着後病院を開いて医療活動を始めるが、この病院は大繁盛であった。パーカーの外科技術はまことに卓抜したものであったらしい。だが、彼はその並外れた医療技術を存分にふるったばかりに、すっかり多忙になり、本来の目的の中国人の精神的変革にまで及ぶ暇が全くなくなってしまったのである。布教と医療の板ばさみに悩んだ彼は、この二つを放棄して新しい活路を見出したのである。彼はその語学力によって、アメリカ利権を代表する対華外交団の一員となったのである。彼は外交的なことに首を突っ込むにつれて、次第に中国人に対する同情心を失っていった。彼は英国に在華利権の安全保障を迫り、まさに崩れゆかんとする彼のかつて愛した老大国中国に対しては“進歩的”新政府の樹立と、外国との自由交易を強要した。しかし、この試みは失敗に帰し、彼はその挫折感によって中国人に対する嫌悪を次第につのらせ、ついには先の進言をするにまで至ったのである。彼は技術に溺れて本来の宗教活動を怠った二人の先駆者シャルルとフェルピーストを後車の戒めとしたにも拘わらず、彼自身その罠に落ちこみ、所期の目的すら見失ってしまった

のである。彼は己れの挫折感をひたすら中国と中国人にふり向け、中国人は「不正直で、義務を回避し、虚偽を伝える」と思い込んだ。彼は自分の失敗など全く認めようとしなかったのである。

彼の失敗の原因は、自らの卓越した医術こそ中国布教の鍵であるとその技術にあまりに頼りすぎたこと、『ジョン・チャイナマン』(1858年4月10日『パンチ』掲載)の戯歌に代表される中国人蔑視の傾向が次第に顕著になりつつあった時代に西洋権益の代表者となったこととである。

しかし、より根本的には西洋人顧問が共通して犯した誤りを彼も犯したからに他ならない。その共通の誤りを著者は次のように指摘している。第一は、彼らが自分達こそ進んだ技術を持っているのだといういわれなき優越感を抱いていたこと。第二は、そのために、その卓越した技術を中国に提供する際に、宗教やイデオロギーという包装で包んで差し出し、中国人にそれをそっくりそのまま受けとれと強要したこと。第三は、これに対し、中国人は相手の言いなりの条件で外国のイデオロギーを受容すれば、それは屈服以外の何物でもないことを感じとっていたことに、彼らが全く気づかなかったこととである。この点に対する著者の分析は極めて明晰である。

このような分析が可能でありえたについては、本書が、1967年から68年にかけてのアメリカのヴェトナム戦争への介入の強化と、それに対する反対運動の盛り上がりの中で書かれたということが象徴的な意味を持つ。著者の目には、おそらく“自由世界の防衛”という、第二次大戦以後の冷戦構造の中でアメリカが抱き続けてきた“道徳的確信”のヴェトナムへの押しつけが、中国における西洋人顧問の問題と二重写しになって映じていたことであろう。はたして、アメリカの抱いたこの幻想は、南ヴェトナムの解放戦争に始ま

り、カンボジア、ラオスにおける社会主義政権の誕生を齎したインドシナ半島でのナショナリズムの昂揚の前にあえなく崩れ去った。それはまさしく中国における西洋人顧問の辿った道程と軌を一にするものであったと言える。

現在、中国は第三世界を中心に大規模な対外援助を行なっている。その基本原則は64年、周恩来首相が発表した「中国の対外経済・技術援助の八原則」に端的に表わされている。その基本的な姿勢は、①援助は一方向的な施しでなく相互的なものである、②援助を与える際、相手国の主権を尊重し、いかなる条件もつけず、いかなる特権も要求しない、③無利子または低利借款の方式、返済期間の繰り延べなど、相手国の負担を軽減することを図る、④その目的は被援助国を中国に依存させるためではなく、その国が自力更生の道を歩むよう援助することである、⑤中国の派遣する専門家は、当該国の専門家と同じ待遇を受け、特殊な要求や待遇は許されない等である。これらの原則は、直接的には、中ソ関係の悪化に伴い、ソ連の援助が突然うちきられ、自国の経済建設に多大な影響を蒙った経験を基礎としているが、さらに根源に遡れば、ここ数世紀にわたる西洋列強の援助と搾取の中で中国が学びとったものであり、その体験に基づいて被援助国の立場を十分考慮した上で打ち出されたものに違いない。

かくて1976年7月、アメリカ、ソ連をはじめとする先進諸国に援助を拒否された炎熱の地に中国の東風号が走ったのである。タンザニア、ザンビアを結ぶタンザン鉄道は、中国から無利子、10年据置、1983年から30年間で償還という有利な条件で援助を得て、完成したのである。その援助は、中国人技師引揚げの後もしさかの機能停滞を生じぬよう、その新技術を他の開発分野でも大いに役立てられるよう、二つの機関車修理工場、設

備工場、鉄道従事者の養成機関の建設をも含む徹底したものであった。

一方、今なお、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの各地で、かつての西洋人顧問の奮闘と挫折そして中国の呻吟とが繰り返し展開されている。その意味から言っても、本書は将来にわたって深い示唆に富んだ一書と言えよう。

(講談社刊)

Owen Chadwick :
*The Secularization of
 the European Mind in
 the Nineteenth Century*

吉田映子

歴史研究において、ある時代とその精神を統括的に表現するような用語がある。例えば〈ルネッサンス〉とか〈啓蒙〉などの用語は、それらが事実何であったかはかならずしも明確にされぬまま、既に了解済みのように使われる。こういった用語を、著者は umbrella-term (or word) と呼び、その限界とともに効用をも認めている。「19 世紀ヨーロッパ精神の世俗化」と題するこの書物で、著者は〈Secularization〉を、一つの umbrella-term として提示しようとして試みている。

〈世俗化〉というのが、狭義には政治制度や教育制度を宗教の支配から、切り離すこと、さらに知識、道徳、芸術などの、宗教的起源、宗教的文脈からの独立を意味していること、それはまた、かならずしも 19 世紀のみに特有なことではなく、西欧近代社会が一貫して追求してきたものであることまでは、常識的

に理解できるとしても、その具体的内容となると、問題は容易ではない。それが否応なしにかかわっている宗教そのものが、とうてい一筋縄ではいかない性質のものである以上、この困難はむしろ当然といえるかもしれない。

問題を広く〈聖〉対〈俗〉ということできらえるならば、それはあらゆる時代、あらゆる社会に、なんらかの形で存在してきたといえる。〈聖〉〈俗〉の定義如何にもよるが、いずれにせよ、完全に〈聖〉なる社会も、完全に〈俗〉なる社会も、かつて存在しなかったからである。他面、それはけっして単純な対立関係ではなく、相互に深く滲透しあうものでさえある。宗教改革が〈聖〉から〈俗〉を切り離すのではなく、〈俗〉を〈聖〉別するものであったことは、あらためて述べるまでもないだろう。18 世紀の啓蒙は、明らかに〈世俗化〉を強力に推進したのだったが、カッシーラも指摘しているように、啓蒙の宗教に対する表面的な敵対性に目を奪われて、その時代の精神的諸問題がつねに宗教問題から強い刺激を与えられていた事実を見失ってはならないはずである。その意味で、著者が〈世俗化〉を、かつて敵味方がそれぞれのサイドから、エモーショナルにぶつけあった言葉としてではなく、近代ヨーロッパの文明と社会が、宗教（具体的にはキリスト教）的要素との間にもってきた関係をあらわす中立的な用語として用いようとする意図は、一応首肯できる。

しかしながら、19 世紀を特徴づけるものとして、例えば〈ルネッサンス〉でも〈啓蒙〉でもなく、なぜ〈世俗化〉なのか、また一方、すでに 19 世紀をある程度概括できそうな〈機械と産業〉とか〈科学〉〈実証主義〉などではなく、なぜ〈世俗化〉なのか、この点について、著者の論じるところを検討してみなければならぬ。

著者が焦点を当てているのは、19 世紀の